

デュピュイ氏への応答

——ここにある「未来」にどう向き合うか——

西谷 修

□「大洪水」の翌日に

「カタストロフ（破局）」についてのあなたの著書が相次いで翻訳されています。もちろんそれは、一年前の大規模な地震・津波災害と原発事故があったからです。『ツナミの小形而上学』の冒頭であなたは、ギュンター・アンダースの遺したノアの寓話を引いています。

ノアが人びとに来るべき災厄を信じさせるために、「未来」を現在に召喚し、大災厄の翌日を強引に演出して、少数の者を目覚めさせたという話です。

破局の予言は、いつも災いが現実になったときにしか真に受けられません。もし破局が避けられれば予言は当たらなかったことになり、それが正しいことが示されるときには、予言は役に立たなかったことになる、そういうパラドクスを背負っています。予言が有効に働くためには、まだ起きていない破局の確実性を人びとが信じ、それが起きないように行動しなければなりません。そのための「未来の論理」を、あなたは「啓発的破局論」として展開してきました。

まさにこれは去年の三月に日本で起きたことです。

宮城沖や首都圏で大きな地震の起こる可能性が高いことはつねづね言われていました。それがいつとわからないものの、人びとはその危険を言い聞かされて、それなりの備えがないわけではありませんでした。それでも今回の災害は予想をはるかに超える規模で、甚大な被害を出し、多くの人びとが犠牲になりました。

とはいえ、この地方の人びとは昔から災害とともに生きてきて、津波をもたらす海はまた、人びとに恵みをもたらす海でもありました。地震や津波はひとたび起きて、その余波が収まれば収束します。だから人びとはその地にとどまり、被災を乗り越えて生活と故郷の町を再建することができます。

ところが今回は、とどまろうにもとどまれない場所ができてしまいました。それが福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染地域です。原発事故に関しても、これまで多くの「予言」がありました。それは、ただ漠とした不安に発するものでなく、科学的データにもとづく推論から引き出された「原発災害」という真摯な「警告」もありました。けれども、それらは真に受けられないどころか、意図的に無視され、排除され、国ぐるみで作られた「安全神話」によって押し退けられてきました。

ところが、自然の猛威によってあらゆる好都合な「想定」は打ち碎かれ、ありえないとされてきたことがすべて現実になり、未曾有の重大事故が起きてしまったのです。そのことで、一過性であるべき災害は底が抜けたように広がり、事態収拾の見とおしも立たないまま、いまでも多

くの人びとの「被災」が続いています。

だからわれわれはこの寓話を、とりわけ原発事故に重ねて受けとめることになります。われわれは文字どおり現実化した「大洪水」の、来ることが信じられなかった「未来」の翌日を生きているというわけです。

□「破局」の明らかさ

もちろん、あなたが想定している「カタストロフ」は原発事故に限ったものではありません。アウシュヴィッツやヒロシマに並んでニューヨークやスマトラ、そしてキョウトが言及され、自然災害や人間の暴力に加えて、文明社会そのものが引き起こすテロリズムや、地球環境の劣化がすべて念頭におかれています。

とういより、そのような個々に取り上げうる「破局」だけでなく、あなたが想定しているのは全般的な「破局」、つまりは「人類の破滅」とも言われる「われわれの世界全体の破局」でもあります。それは、核兵器その他の大量破壊兵器による戦争で引き起こされるかもしれないし、全世界の技術的産業化によって避けがたく進む人類の生存環境の破壊によって招来されるかもしれません。

いずれにせよ、人間の暴力と自然の限界とが相まってこの「破局」の未来を予見させるわけですが、科学技術と産業経済によって組織化された現代の世界では、一人ひとりの人間の意図を超えて「行為の自動化」のサイクルができており、不都合な成り行きが確実なものとして予想されていても、それに歯止めがかかりません。だから、「破局」は避けがたい「運命」のようなものになっています。

もちろん、それを「運命」として受け入れるなら、われわれはそれについて考えるには及ばないでしょう。ここでは考えることは、そのような「運命」に対する抵抗の意味をもっています。とりわけ、「破局が避けられないのはなぜか」と考えることは、きたるべき破局の「運命化」に対する挑戦だとも言えるでしょう。

□「悪」と「終末論」

ただ、あなたの議論にわたしたちがそのまま従えるわけではありません。あなたはご自分の論議のよって立つ位置にたいへん意識的で、「西洋的思考の伝統の上に立っている」と言われます。ではわたしたちはといえば、基本的に二つのことを指摘できると思います。

ひとつは、わたしたちは自然の災害を「悪」とは考えないということです。もちろん、人びとはそれで多大な被害を被りますが、その災禍をもたらす自然は、またわれわれの生きる大地であり、日々の恵みをもたらす山や海です。ひとことで言えば、ここでは天地を創造した唯一神は想定されていません。だから、災厄の背後に害意をもつ行為主を想定することはふうつはありません。そして、その前に人間の「罪」が問われるということもないでしょう。

自然は、神の造った被造物の世界で人間と対立するというより、むしろあなたも著作で引用しているアメリカ先住民たちのように、自然は人間がそこに生まれ、その恵みのなかで生きる

場であり、その存在の前提です。当然ながら自然は人間より先行しており、人間はそれに依存して生を営んでいます。

とはいえ、人間が被害を被る以上、「禍・災（わざわい）」に「悪」のニュアンスがないわけではありません。けれどもそれが「悪」という価値の極として取り出されることはないでしょう（もちろん、通俗的に自然災害を何かの「罰」だと受けとめる傾向はあります。だが、そう受けとめるのは「災害」の不幸を解釈する主観的推量であって、それが一般的理解になるわけではありません。ましてや自分ではない他の人びとの不幸に関して、それを「罰」だなどと言うのは、わが身を省みず他人への思慮も欠いた不遜で傲岸な物言いだということになります）。

とはいえ、そのような受け止め方は、西洋的技術や産業システムが導入され、それにとまって自然に対する「開発と利用」という姿勢が取り入れられてからは変わってきています。けれども、それによって組織された生活の実用的な局面がいったん破綻してしまえば、今でも、その背後からそれ以前の習性が浮かび上がってきます。世界を創造し、自然を人間に与えた「神」は想定されませんが、その代わりに自然そのものに神々が宿っているとみなされ、だから自然を敬うことが神々を祀ることに通じます。そうした傾向は「郷愁的」として斥けられたりもしますが、たとえば近代産業システムのもたらした災厄を克服する「水俣の海の再生」といった営みが、ある種の宗教性ないしは「聖性」との関係の蘇生につながっていることが感じられます。

もうひとつは「終末論」についてです。「未来の破局」という考えは、それ自体がキリスト教的西洋においては、時間観念の規範的構成原理として織り込まれています。つまり、時間は「終り」に向けて一方向に不可逆的に進むとみなされていますが、その「終り」が「破局」です。それが「終末論的時間」と言われるものですが、「破局」が原理的に、つまりは時間の導かれる終局として想定されるのは、西洋的思考にとってはある意味では当然のことでしょう。近代の世俗化された時間観念は、その「終り」を変質させてしまいましたが、それでも「最後の審判」という限界を消し去ったその空位が、そのまま「無限」を約束したことにはなっていないでしょう。

かつての「神の摂理」としての「救済への歩み」にとって代わった、科学技術の「進歩」と産業経済の「成長」、それによる人間世界の「無限の発展」、つまりは「自由」の実現という近代世界の人間中心主義的シナリオは、いわば世界の「改宗」に成功して、ここ一五〇年ほどの世界の歩みを導いてきました。けれども、しばらく前から資源の枯渇や地球環境という物理的限界に出会って、このシステムは揺らぐようになりました。その限界は空間的なもの、あるいは量的なものであるだけではありません。無限定に開けていたはずの「未来の有限性」として、時間的にも立ち現れてきたのです。

これをわたしは倫理的問題としては考えませんが、あなたが西洋の倫理的思考の脈絡をたどりながら取り組んでいる「未来との関係」という問いは、この「有限性」を共有する現代の世界では、誰にとっても抜き差しならない課題です。これからふれるように、あるときから「人類」は否応なしにひとつになり、同じ「運命」を共有するようになりましたが、その予見しうる「運命」が、われわれ全体に根本的な態度変更を迫っているということだと思えます。だからおそらく、ユダヤ・キリスト教になじみのない読者も、『ツナミの小形而上学』の「未来を悼む」の

章にもっとも強く感応したのでしょうか。

□ひとつになった「人類」

思うに、日本が西洋の形而上学的問題を深く共有するようになったのは「世界戦争」の経験からだと言ってよいでしょう。もちろん、明治期に和服をやめて洋服に着替えて以来、日本の社会はあらゆる面で西洋の規範を受け入れてきました。けれども、外では洋装で通しても、家では和服に着替えるように、洋装は多くの場合「よそ行き」用でした。だからこそ、本家の西洋の規範からすれば、日本人は「アンスロポス」（人種的人間）ではあっても「フマニタス」（人間的主体）ではなかったと言えます（ある意味では今でも構造的にそうである）。けれども、「世界戦争」の経験——それ自体が西洋の世界展開の帰結として生じたものでしたが——のなかで、地球上のあらゆる人々は好むと好まざるとに拘らず同じひとつの全体に、つまり「人類」に属することになりました（この場合「人類」は一般概念としての「人間」と同じであり、西洋語で言えば「ヒューマニティ」ということになる）。西洋の拡張は「世界戦争」のうちで世界の「全体性」と融合し、その結果、われわれも「人類=人間」の範疇に入ることになったのです。

そして、そのことを端的に物理的に象徴したのが最初の核兵器・原子爆弾でした。この殲滅兵器はたった一発で、世界の少なからぬ知識人に「人類の滅亡」の危機を想定させました。一方で戦争の「世界化・全体化」によって、他方でそれに対応する殲滅兵器の開発によって、「滅亡」の予兆のもとに一括りにされることで、「人類」という観念は初めて現実性を帯びるようになったのです。そしてそれ以後、「滅亡の危機」にどう対処するかがみずからの振舞いにかかっているという意味で、その全体的行為の集合的「主体」として、われわれは「人類」を語らざるをえなくなったのです。

ついでにふれておくと、最初に原子爆弾は三つ造られました。西洋的思考の伝統においては、これが三発だったということには特別な意味があるでしょう。事実、最初の実験は「トリニティ・テスト」と名付けられました。つまり「三位一体」、父なる神と子としてのイエスそして精霊が三つのペルソナにして一という、キリスト教の奥義です。この「三位一体」が科学技術の粋として出現することによって世界は「新しく」なり、「人類=人間」はついに一つになったのです。

□尺度を超えた力

わたしに馴染みのあるフランスの作家 M・ブランショは「核兵器によって、人類は自殺の能力を獲得した」と言いました。サルが自殺しないということを考えれば、これも「進化」の証だと言えるかもしれません。けれどもこの「進化」は不吉なものです。

その不吉さは、「核の平和利用」によって消えるものではありません。というのは、核技術が原理的に、人間の制御できない物質プロセスを引き起こすものだからです。それが物質の安定のなかに封印されていた放射性崩壊です。核技術はこの安定の封印を破ることで巨大なエネルギーを解放しますが、それによって解き放たれる放射性崩壊のプロセスを、この技術は制御することができません。というより、この技術はただエネルギーを解き放つだけで、そんな「副

次効果」は眼中においていませんでした。ところがこの「副産物」は放射性物質であり、それが何万年もの間放射線を出し続けるのです。その時間の幅は、人間の経験的時間の尺度をはるかに超えています。

つまりこの技術は、膨大なエネルギーを得ることを目的とし、それ以外に核反応から生じる諸効果については関心をもっていません。通常、技術はその目的に照準を合わせて作られます。ときにそれが目的外の副産物を生み出すことがありますが、その弊害が処理しうるレベルであれば問題にはならないでしょう。けれども核技術は、得られるエネルギーの規模が破格であるだけでなく、その意図を超えて生み出される副次効果が、人間的規模の限界をはるかに超えている。だからこそ、そこから逆に「人類＝人間」のステイタスや存続が問われる事態が生じるのです。

核技術と遺伝子工学とを同時代的なものとして問うたのはハイデガーでした。核も遺伝子も、自然や人間の存在基盤そのものに関わる要素です。それに人為的手段で変更を加えたらどうなるか？ 目指した目的は手に入れられるでしょう。しかし、開発するときには、それがどのような波及効果を生み出すかは考慮に入っていません。得られる目的の前にそれを考えることはわきに置かれます。言い換えれば、技術の功利主義が、「役立つない考慮」を排除させるのです。そしてそれが「未来」を侵食することになります。

あなたが指摘するように、今ではそれにナノテクノロジーも加わります。そのことの意味を、技術とそれを実用化しようとする意志はけっして問うことをしません。そのような「無思考」の帰結にわれわれは直面させられることになります。

□行為者のいない「悪」？

さきほどわたしは、災害を「悪」とみなす伝統はないと言いました。地震は予測できないし、人間には活断層を制御することはできず、それに対する備えにも限界があります。自然の猛威がもたらすものは純粋な「災厄」であり、被災そのものに倫理的判断をくだすことに意味はありません。もちろん、可能な備えや災害への対処に関する行政上の責任等については別のことです。また、被災した人びとが、その「度外れた」不幸と折り合いをつけなければならない、というのも別のことです。

ところが、原発災害は事情が違います。原発はやはり「度外れた」何かであるとしても、それは人間が造り出したものであり、戦後の日本社会がその発展のために選択してきたものです。その際、政府や電力会社が「絶対安全」と言い、学者たちやメディアもこぞってそれを支え、原子力発電を推進してきました。ところが、そこで言われてきたことのすべてが絵に描いた餅だったということが、地震と津波によって引き起こされた事故によって白日の下にさらされました。だからこの事故では、行為主や責任主体を名指すことができます。もちろんそれは具体的な個人に同一視はできませんし、そこに確かな「悪意」があったとは言えませんが、少なくとも意図的な「無思考」（思考の切捨て）による選択の意志は働いていて、それに関する組織的な同意があり、それが大きな政治的圧力を生み出していました。

だから、われわれはそれについて責任を問うことはできるし、事態を質するためには責任を問

わねばならないでしょう。今回の原発災害でいうなら、まずは事故があると隠ぺいを繰り返し、地震や津波対策の点検を求められても無視し続けてきた原発の運営主体の東京電力や、原発政策のチェックをすべき機関でありながら安全対策の強化に圧力をかけていた経産省安全・保安院の責任を問わねばなりません。それにまた、みずからその機関を抱え、さまざまな解決困難な問題を抱えながら他の可能性を排除してまで原発を推進してきたこれまでの日本政府に責任があります。そのどれも、いまだに今回の災害の責任をとってはいませんが。

とはいえ、「無思考」は咎められても、担当者の一人ひとりに「悪意」があったとは言えないでしょう。ただ、直接の「悪意」がなかったとしても、組織内での役割に順応することで、大きな事故を引き起こすことになったという責任が問われるわけです。

その点でわれわれは、あなたがアレントなどを引いて言う「システムの悪」の論議に留保なく合流することができます。あなたは「自然の悪」と「道徳的悪」とを区別し、近代に後者が前者を呑み込むことを示し、その果てにやがて誰に責を帰すこともできない「システムの悪」が生まれることを論じています。その種の「悪＝災厄」には個々の人間の悪意も見出せず、また相手がいないから犠牲者に憎悪も生じない。そしてそれに対処することが現代の倫理的要請になっている、と。それがまさに原発事故のようなケースです。

□「想定」という壁——核技術の表と裏

福島第一原発の事故が示したのは、原子力発電所に重大事故が起こらないという想定は、起こる可能性を「想定外」に置くという恣意的な決定によって維持されてきたものだったということでした。それだけでなく、かりに事故が起こらないとしても、使用済み核燃料は膨大に溜まってゆき、それが人間の生存環境をますます危険にさらすということも、あらためて示すことになりました。

また、予防措置の範囲を決める「想定」は、経済原則への配慮によって左右されており、それが通用するのは、幸いにして事故が起こらない間だけのことです。実際に「想定外」に置かれた事態が生じ、「非現実的なこと」が現実化してしまうと、その被害は経済的にみても（補償費用に換算して）桁外れになり、安価だとして推奨されていた原子力発電の「リスク」も含めたコストは膨大なものになります。

それにもかかわらず、原発使用が国家の政策として推進されてきたのは、ひとつには核技術を確保するという「国家の欲望」とでも言うべきもののためでしょう。それによって国家の威信をえようという、世界戦争の時代の後遺症です。

それと、核技術が当初からもつ集合的組織的性格があります。マンハッタン計画が示すように、核兵器開発は軍と学者・技術者集団と産業界を統合した巨大国家プロジェクトとして推進されました。そしてその後の原子力発電事業も、やはり同じように国家主導の政界・官界・産業界・学界を結合した巨大プロジェクトとして組織されてきたのです。そこに世論形成のためのメディアが加わり、「未来の無尽蔵のエネルギー源」といったキャンペーンが行われ、核技術を称賛し期待を高める機運が作られました。そのすべてが「全体戦争」を遂行した体制を継承しているのです。

その一方で、国家間戦争における核兵器の使用がいくつもの理由から「禁じ手」になると、戦争は「熱い戦争」から潜在的な「経済戦争」へと場を移しましたが、それが相変わらず「戦争」だと言えるのは、「国力」が競われるからです。そのような国家態勢のもとで「経済発展」が金科玉条として掲げられ、そのためのエネルギー確保が最重要の課題とされます。そして、そこに原子力発電が「エネルギーの魔法の杖」として埋め込まれることになります。まずはその技術の先端性が謳歌され、放射能汚染の不安に対しては「安全」が強調され、そしてその「経済性」の高さと「無尽蔵の可能性」（一九世紀に挫折した「永久機関」まがいの核燃料サイクルの夢物語まで含めて）が強調されます。それが多少の危険を伴っても、あるいは事故を起こしても、なるべくその規模は軽微にみせ、社会に広がる不安や不信に対しては、「資源枯渇」や、最近では「地球温暖化」を持ち出して、原発の必要性を押し通す。「経済成長」と「資源問題・環境問題」の板ばさみを突破するには原発しかない、という論理です。そしてその論理が、よく言われるように、政・官・産・学・メディアの「五重の壁」によって守られてきました。

□ 「無思考」と「想定外」

先ほどから何度か「無思考」ということを述べました。それはハイデガーやその弟子だったアレントとアンダースが共通して問題にしたことです。

簡単に言うならそれは、人間の開発した技術的手段が、人間の尺度をはるかに超える効果を生み出してしまい、その結果を人間が制御できない、といった事態が生じます。それが核技術の場合です。あるいは、遺伝子技術であれば、遺伝子を操作してある病因を阻止するとか、特定の形質を得るとかの目的は果たせるが、生物のインテグリティや世代的再生産に関わる以上、その影響が計りがたいといったことがあります。それはナノテクノロジーの場合でも同じでしょう。

また、そうした技術を扱う社会の組織的状況の問題もあります。つまり、個々人は先に述べたような巨大なメカニズムのなかでの限定された位置に置かれ、まったく部分的な役割しか担えないため、全体的な見通しや結果に参加できず、与えられた職務を「善」として遂行しても、それが巨大な「悪」の産出に奉仕することにもなるということです。

これら現代の人間社会の活動の諸局面に共通しているのは、ある目的のために行われる行為が、その生み出す目的外の効果や影響について盲目であるにもかかわらず、その目的だけが当座の「善」として追及される、ということです。言い換えれば、技術にまつわる有用性が、その技術が引き起こす「目的外」の効果を、「無意味」なものとしてしか扱えないということです。

そして人間がシステムの一部、ひとつのコマとなると、自分のポジションに責任をもつ個人は、システム全体の生む効果には目を向けようとはしません。専門化と言われる事態の欠陥でもあります。

核技術について言うなら、エネルギーを得るということが、現在の人間の企ての視野を決定しています。するとその結果生じる「廃棄物」——じつはどこにも廃棄できないのですが——についてはいつも先送りされます。だから、政府も電力会社も、核廃棄物について見通しがなくても原発を稼働しようとするわけです。

「未来の破局」の可能性についても同じです。多くの科学者が一致しているように、それがほとんど「確実」だとしても、そこへと向かう流れは止まる気配はありません。

□ここにある「未来」

あなたは「未来」との関係の問題にされました。とりわけ、「宗教的な迷妄でない終末の予言」をどう受け止めるか、ということ。それに触発されながら、それとは違ったかたちで——「終末」を現在に投射するというのとは違ったかたちで、わたしも「未来」との関係を考えてみたいと思います。

ところで、この「思考されない」部分こそ「未来」に関わるものです。福島第一原発の事故の後、政府から「ただちに健康に影響はありません」というコメントが繰り返し出されました。そう、「ただちに」影響は表れない。だが、そこから先は…。この種のコメントは、まだ「大洪水」の前なら有効だったかもしれません。けれども、大洪水はすでに起こり、われわれは思考から排除された「想定外」のうちに、つまりは「未来」のうちにいるのです。

「ただちに影響はない」という言い方は、「この先」をとりあえず考慮の外に置いて現在の不安を抑える、ということを目指しているでしょう。つまり「未来」を思考から排除することです。ところが「未来」はすでにここにあります。われわれや子供たちの生存を脅かす放射能（放射性物質）は、「まだ」影響を示さないままあたりに広がっているのです。

それは先ほどの「無思考」ということの構造と似ています。過去や現在はそれなりにはっきりした姿をもち、それを考えることができます。けれども「未来」はいまだ現実ではなく、無規定で無定形です。だから思考の外に置かれます。あるいは思考が届きません。言い換えれば、「思考されないもの」、それは「未来」に関わるものなのです。

核技術は人間の尺度を超える時間を導入しました。つまり、それは人間が経験的に関わる世界、それが形作る物質の安定を破って、何万年にもわたって放出される放射能を解き放ちました。そのため、無規定に開かれていた「未来」は、わたしたちにとって数えざるを得ない「時間」になりました。言い換えれば「未来」は数えうるもの、手触りのあるものになったのです。

「未来」はもはや無規定に開かれたものではなく、そこに手触りをもって存在します。

ギュンター・アンダースの『オフ・リミット』に序文を書いているロベルト・ユンクは核に対する警告の書を『未来はすでに始まった (Tomorrow is already here)』と題しました。これは「いま行動しなければいけない」という意味のようですが、実に含蓄の深いことばです。「未来はすでにここにある」と。

わたしはこれを存在論的な議論とは違ったかたちで考えようと思います。ハンナ・アレントが言っているように、哲学は人間を単数で考えてきました。アレントはそのために政治が抜け落ちると考えました。そして政治とは複数の人間の間にあります。

けれども、人間の複数性は共時的なだけではありません。それはまた通時的でもあります。もっとはっきり言えば、人間も他の生き物と同じように世代を引き継いで、存在し続けてゆきます。そして世界の時間はひとりの人間によって、ひとりの個体によって生きられるだけではありません。わたしたちの生は、わたしたちの子供によって引き継がれてゆきます。

だとしたら、「未来はすでにここにある」のです。いま育ちつつある子供たちとして、そしていま孕まれている胎児たちとして。

明日への配慮とは、自分ひとりの明日ではないし、未来とはわたしひとりによって生きられるものではありません。わたしたちが老いて去るとしても、これから生きてゆくのは子供たちです。未来を考えると、だから自分の時間の延長にある将来を考えるのではなく、他者たちを考えることなのです。それも「すでにここにいる他者たち」を。

したがってその配慮は、エゴイスティックな貪欲なものではありません。むしろ寛大な贈与のような配慮です。

明日、わたしは死ぬかもしれない。けれども子供たちは生きてゆく。それは絶望ではなくわたしたちに希望を与えるものです。

だから未来を考えなければなりません。未来は現在によって締め出されているのではなく、ここに具体的に、育ってゆくものとして、宿されたものとしてあるのです。

近代の人間観は、孤立した個人を、自由な独立したものとみなしてきました。そして未来を発展や成長といったタームの型にはめて考えてきました。そこから、経済学のモデルとしての「ホモ・エコノミクス」といった類型が生まれます。けれども、被災地でわたしたちが見たのは、すべての社会的・組織的支えを奪われて裸で遺棄された人間は、自分ひとりが生き延びることよりも、人を呼び求め、共に生きようとするのだということでした。それは「ホモ・エコノミクス」がけっして人間の類型たりえないという証でもあります。

「ここにある未来」に目を向けること、「この未来」に配慮すること、それが技術の功利性や経済的配慮が避けがたくする「無思考」を抜け出る道ではないでしょうか。そして同時に、人類が呼び覚ましてしまった「手触りのある未来」に向き合う道なのではないでしょうか。

